

論説

サオ語 (台湾中部) における否定表現

新居田純野

1. はじめに

台湾中部の日月潭周辺に住むサオ族は 2001 年に台湾の行政院によって公式に認知された「第十番目の原住民」である。その言語、サオ語⁽¹⁾はオーストロネシア語族に属する。サオ族の人口は約 300 人である。また、現在では、日常生活に使用する言語は、主に台湾語と中国語であり、サオ語を話せる人は 60 代以上の少数の人たちである。そして、サオ語は、サオ族同士の会話の中に時々使用される程度である。本稿で用いる資料は、筆者が 60 代～80 代の話者から得たものである⁽²⁾。また、先行研究より引用した資料もすべて筆者がインフォーマントに再度確認して分析しており、先行研究中の用例とは異なった発話になっているものもある。

サオ語で否定をあらわす場合、否定辞 uka (存在否定), ani (デキゴト全体の成立を否定), antu (後続する句を否定), ata (命令否定), niwan (まだ～でない), niza (決して～でない), ingqa (したくない, 必要ない) などが用いられる。

本稿では、これらの否定辞を取り上げて、その使用について報告をする。また、これらの否定辞の中で、ani と antu には互換性がある場合とない場合があり、その意味的・統語的違いについても、ここでは明らかにして

(2)

いく。

2. 先行研究

黄 (2000: 114) では, ani, antu, uka, ata が取り上げられている。Blust (2003: 233) では Grammatical Miscellany (pp. 216–240) で ani, antu, について扱っている。Chen (2000), Wang (2004) では, ani, antu, uka のほかに niwan, niza, ingqa, qaiza⁽³⁾ について言及している。

また, ani と antu の違いについては, 黄 (2000) では, 「antu は過去においてまだ未発生 of 事柄, あるいは未来発生可能な事柄を否定する場合について用いるが, ani との違いは現段階でははっきりしていない (筆者訳)」としている。また, Blust (2003) は 「ani は主動詞を否定し, この場合, 主語に先立ち (用例 (1)), antu は補助動詞 (auxiliaries) を否定し, この場合, 主語の後ろにつくが (用例 (2)), antu は対比的な機能 (用例 (3)) を持つ。しかし, ani と antu の違いを区別するのは難しい (筆者訳)」としている。

(1) ani thithu tu malalia (Blust 2003: 233)
NEG 3. 単. 主⁽⁴⁾ 助 はしる
'He's not running.'

(2) thithu antu miku palalia (Blust 2003: 233)
3. 単. 主 NEG 好き 走る
'He doesn't feel running.'

(3) antu yaku sa⁽⁵⁾ shi-tusi Taipak tilha (Blust 2003: 233)
NEG 1. 単. 主 助 PST-行く 台北 昨日
'It wasn't me who went to Taipei yesterday (it was someone else)'

また, Chen (2000) では, ani が Declarative (叙述文), Locative (所

在文)に、antu はそれらに加えて、Equational (等位文), Pseudo-cleft (疑似分裂文)にも使用されるとしている。

さらに、Wang (2004) も、「ani は文頭で名詞句の前に、antu は名詞句あるいは述語の前におかれ、意味的には、antu は対比的で、ani は中立的である (筆者訳)」としている。

つまり先行研究では ani と antu の文中での現れる位置について言及しており、意味的には antu が対比的な意味を持つということが提示されている。

3. 否定表現の統語構造について

3.1 存在

存在は、存在動詞 itia (～がある), 所有動詞 yanan (持っている), 指示動詞 i-nay (ここに～がある)・i-say (そこに～がある)・i-tusi (あそこに～がある) などによって表現される。ここでは、存在文, 所有文, 所在文に分けて、その構文形式と否定表現をみていくことにする。

3.1.1 存在文の否定

存在文は所有動詞 yanan で表される。自然物の存在 (用例 (4) (5)), 具体物の存在 (用例 (6) (7)), 人の存在 (用例 (8)) などを表すことができる。

- (4) zintun yanan rusaw
 日月潭 所-持つ 魚
 ‘日月潭には魚がいる。’

- (5) hudun yanan wazish
 山 所-持つ 猪
 ‘山に猪がいる。’

(4)

(6) pangka wa⁽⁶⁾ fawfaw yanan patashan
机 連 上 所-持つ 本
'机の上に本がある。'

(7) palanan yanan lhuzush
かご 所-持つ すもも
'かごにすももがある。'

(8) zintun a barabaw yanan sa thaw
日月潭 連 徳化社 所-持つ 助 サオ族(人)
'日月潭の徳化社にはサオ族がいる。'

存在文は否定存在動詞 uka (～がない) によって否定文となる。一般的な語順は「存在場所+uka (sa)+存在物」(9) (11) となるが、uka と存在場所の語順は比較的自由(10)である。

(9) zintun uka sa rusaw
日月潭 否存 助 魚
'日月潭には魚がない。'

(10) uka haya wa hudun wazish
否存 指(この) 連 山 猪
'この山には猪がない。'

(11) pangka wa fawfaw uka sa patashan
机 連 上 否存 助 本
'机の上に本がない。'

3.1.2 所有文の否定

所有をあらわす場合、二通りの方法がある。一つは(12)から(14)のように、所有者が所有物を所有していることをあらわし、もう一つは(15)・(16)のように、その所有物の存在場所も共起させる場合である。語順は「所有者+所有動詞+所有物+所有場所」となる。

- (12) yaku yanan tuali
 1. 単. 主 所-持つ 金
 ‘私は金を持っている。’
- (13) yaku yanan ayuzi
 1. 単. 主 所-持つ 男, 夫
 ‘私は夫がある。’
- (14) yaku yanan sa tamakuan
 1. 単. 主 所-持つ 助 畑
 ‘私は畑がある。’
- (15) yaku yanan sa taun i-Taipak
 1. 単. 主 所-持つ 助 家 場-台北
 ‘私は台北に家がある。’
- (16) yaku yanan tuali i-taun
 1. 単. 主 所-持つ 金 場-家
 ‘私は家にお金がある。’

ただし、存在文と同様、所有者を主格で表さない場合は存在動詞 itia が使われ、所有者は属格となって所有物に前接する。

- (17) itia sa nak a tuali
 存 助 1. 単. 属 連 金
 ‘私のお金がある。→私はお金がある。’

所有文は存在文と同様、否定存在動詞 uka (～がない) によって否定文となる。語順は「所有者+uka+(sa)+所有物+所有場所」となる。

- (18) yaku uka sa tuali i-taun
 1. 単. 主 否存 助 金 場-家
 ‘私は家にお金がない。’
- (19) yaku uka sa taun
 1. 単. 主 否存 助 家

(6)

‘私は家がない。’

(20) yaku uka sa tamakuan

1 単.主 否存 助 畑

‘私は畑がない。’

3.1.3 所在文の否定

所在文は指示詞から派生した指示動詞，あるいは「場所接辞+場所」によって表される。サオ語の指示動詞は話し手に近くて見えるものの所在を表す場合は i-nay (ここに～がある)，聞き手に近くて見えるものの所在を表す場合は i-say (そこに～がある)，少し離れていて何かの陰などで見えないものの所在を表す場合は i-suy (あそこに～がある)，離れていて見えない遠いところにあるものの所在を表す場合は i-tusi (あそこに～がある) となり，物が近くにあるかないか，見えるか見えないかによって使用される指示動詞が異なる。語順は「所在物+指示動詞+所在場所」，あるいは「所在物+場所接辞-所在場所」となる。

〈指示動詞〉

(21) patashan i-say pangka wa fafaw

本 指(動)-そこ 机 連 上

‘本は机の上にある。’

(22) mihu a azazak i-nay nak a taun

2. 単. 属 連 子供 指(動)-ここ 1. 単. 属 連 家

‘あなたの子供は家の中にいる。(話し手が家の中にいる)’

また，所在物と指示動詞の語順は自由である。

(23) itusi nak a taun taipak

指(動)-あそこ 1. 単. 属 連 家 台北

‘私の家は台北にある。’

〈場所接辞-所在場所〉

(24) nak a ama i-taun

1. 単. 属 連 父 場-家

‘父は家にいる。’

(25) la-tata wa patashan i-fafaw a pangka

数-1つ 連 本 場-上 連 机

‘一冊の本が机の上にある。’

所在文の多くは、否定存在動詞 uka (～がない) によって否定文となる。antu でも否定文にすることができるが、その用例は少なく、antu は uka tu に置き換えることができる。

存在文・所有文では否定存在動詞 uka に存在物・所有物を表す名詞句が後続するのに対し、所在文では所在物と uka との語順が自由であり、存在文・所有文では後続する存在物・所有物が主題化されて、それらの前に助辞 sa が置かれる ((9) (11) (14) (15) (18) (19) (20) 省略されることもある) が、所在文では後続する所在場所を提示するために、(26) (27) (29) (30) のように、助辞 tu が置かれる (省略されることもある)。これらが存在文・所有文の否定文と異なる点である。所在文の否定では否定存在動詞 uka が使用されることで、肯定文における指示動詞が動詞としての機能を失い、所在場所のみを表すようになるが、(31) (32) のように antu が使用される否定文では、指示動詞は動詞としての機能を持ったままである。

(26) mihi a azazak uka tu i-nay nak a taun

2. 単. 属 連 子ども 否存 助 ここ 1. 単. 属 連 家

‘あなたの子どもは私の家にはいない。’

(27) patashan uka tu i-fafaw a pangka

本 否存 助 場-上 連 机

‘本は机の上にはない。’

(28) uka nak a taun i-taipak

(8)

否存 1. 単. 属 連 家 場-台北

‘私の家は台北にない。’

(29) nak a ama uka tu i-taun

1. 単. 属 連 父 否存 助 場-家

‘私の父は家の中にない。’

(30) la-tata wa patashan uka tu i-fafaw a pangka

数・1つ 連 本 否存 助 場-上 連 机

‘一冊の本は机の上にはない。’

(31) nak a azazak antu i-nay

1. 単. 属 連 子供 NEG 指 (動)-ここ

‘私の子供はここにない。’

(32) nak a wazish antu i-say

1. 単. 属 連 猪 NEG 指 (動)-そこ

‘私の猪はそこにない。’

3.2 叙述文における否定 ani と antu

ここでは、一般否定辞 ani と antu について、名詞述語文、形容詞述語文、動詞述語文にわけてみていく。

3.2.1 名詞述語文における否定辞 ani, antu

ani は文全体を否定するため文頭に置かれ、antu は否定する語の前に置かれる。そのため、antu は文中に置かれる位置に関しては制限がない。ただし、名詞述語文で ani を使用すると、あるインフォーマントは、そこには「好きではない」というニュアンスが生じると話していた。

(32) yaku antu thaw

1. 単. 主 NEG サオ族の人

‘私はサオ族ではない。’

(33) ani yaku (tu)⁽⁷⁾ thaw
 NEG 1. 単. 主 助 サオ族の人
 ‘私はサオ族である、ということはない。’

(34) haya antu patashan
 これ NEG 本

(35) antu patashan i-zahay
 NEG 本 これ
 ‘これは本ではない。’ ((34) (35))

(33) のように、ani は常に文頭に現れ、「ani (yaku caw) (私はサオ族の人である) ではない。」のように後続する文全体を否定すると考えられる。それに対して、antu は常に後続する名詞句、(32) では caw (サオ族の人) を、(34) (35) では patashan (本) を否定する。このようにして、antu は文頭にも文中にも現れうるのである。

3.2.2 形容詞述語文における否定辞 antu

筆者の調査では、形容詞述語文の否定文に使用される否定辞の多くは antu であった。形容詞述語文では、おもに antu によって否定され、antu は常に形容詞句の前に置かれる。これは、ものの性質・状態や人の感情を描写する形容詞述語文が含みこんでいる他との比較的な性質が、antu のもつ相対比較的な性質と関係しているのではないかと考えた⁽⁸⁾。

(36) haya fatu antu ma-brith
 この 石 NEG 状-重い
 ‘この石は重くない。’

(37) nak a binanau‘az antu la-ma-qitan
 1. 単. 属 連 女(娘) NEG 形容詞の程度(とても)-状-きれい
 を表す接辞
 ‘私の娘はあまりきれいではない。’

また、形容詞述語文で ani が使われるのは、次の用例のように、文の表

(10)

すことがら全体を否定する場合で、ani は文頭に来る。

(38) ani haya wa rusaw ma-ra'in
NEG この 連 魚 状-大きい
'この魚は大きい、ということはない。'

(39) ani haya wa fizfiz ma-qitan a kan-in
NEG この 連 バナナ 状-いい 連 食べる-PF
'このバナナはおいしい、ということはない。'

3.2.3 動詞述語文における否定

動詞述語文においても、名詞述語文と同様、antu は後続の動詞句を否定する。ani は文頭におかれて全文を否定する。ただし、時を表す副詞句は、ani の前でも後ろでもよい。

(40) tilha ani yaku m-in-atipish ihu (ihun)
昨日 NEG 1. 単. 主 AF-PST-ぶつかる 2. 単. 主 (対)
'昨日、私があなたにぶつかった、ことはない。'

(41) tilha yaku antu m-in-atipish ihu (ihun)
昨日 1. 単. 主 NEG AF-PST-ぶつかる 2. 単. 主 (対)
'昨日、私はあなたにぶつからなかった。'

(42) ani yaku pishqati sazum
NEG 1. 単. 主 温める 水
'私が水を温める、ことはない。'

(43) yaku antu a pishqati sazum
1. 単. 主 NEG 非実 温める 水
'私は水を温めない。'

(44) ani yaku t-un-maza Kilash a lalawa
NEG 1. 単. 主 AF-聞く キラシ (人名) 連 話
'私がキラシの話を聞く、ことはない。'

- (45) yaku antu t-un-maza Kilash a lalawa
 1. 単. 主 NEG AF-聞く キラシ 連 話

‘私はキラシの話を聞かない。’

動詞述語文では、antu と ani のどちらでも否定することができるが、必ずしもすべて互換性があるわけではなく、意味上の違いがある。この点については、3.6 で詳しくみることにする。

3.3 命令文の否定

命令形は、動詞に接尾辞-i をつけてつくられる。

- (46) ku-rubuz-i haya wa taun!
 壊す-IMP この 連 家

‘この家を壊せ!’

- (47) pa-psaq-i atu!
 CAUS-蹴る-IMP 犬

‘犬を蹴るんだ!’

- (48) kan-i fizfiz!
 食べる-IMP バナナ

‘バナナを食べろ!’

命令文の否定は否定辞 ata を用いる。構文形式は次のようになる。

ata + (ihu) + tu + 動詞の命令形

tu は ata と共起する場合が多いが、省略されることも多い。

① 他者への命令

- (49) ata tu kan-i fizfiz!
 IMP・NEG 助 食べる-IMP バナナ

‘バナナを食べるな!’

- (50) ata tu i-lhungqu-i sa i-zay a pangka!
 IMP・NEG 助 場-座る-IMP 助 そこ 連 椅子

(12)

‘その椅子に座るな!’

(51) ata riqaz-i haya wa binanau’az!

IMP・NEG 見る-IMP この 連 女

‘この女の人を見るな!’

(52) ata tu shkash-i yakin!

IMP・NEG 助 おそれる-IMP 1. 単. 対

‘私を恐れるな!’

また, ata が使用される範囲が, 二人称の場合だけではなく, 以下の用例のように独り言における自分への提案や, 相手への提案にも使われる。この場合, 動詞は命令接辞-iをとらない。

② 独り言 (提案)

(53) haya bukay ma-qitan, ata tu ara-in

この 花 状-きれい IMP・NEG 助 とる-PF

‘この花はきれいだから, とらないでおこう。’

(54) thuini ma-thuaw ma-shimzaw, ata tu un-ruza.

今日 状-とても 状-寒い IMP・NEG 助 動-船

‘今日は寒いので, 船に乗らないでおこう。’

③ 相手への提案

(55) ihu antu miku u-tantu, ata tu u-tantu

2. 単. 主 NEG 好き 行く IMP・NEG 助 行く

‘あなたが行きたくないなら, 行かないでおきましょうか。’

3.5 その他の否定

その他の否定表現には, niwan (まだ～ない), niza (もう～ない), ingqa (したくない, 必要ない) などがある。

3.5.1 niwan (まだ～ない)

niwan は、まだその事態が実現していないことを表す。

- (56) niwan yaku t-un-maza
 NEG 1. 単. 主 AF-聞く
 ‘まだ聞いたことがない。’
- (57) niwan yaku mi-m-riqaz ihun
 NEG 1. 単. 主 状-AF-見る 2. 単. 対
 ‘まだあなたを見ていない。’
- (58) niwan tu a buqnur ihu
 NEG 助 非実 おこる 2. 単. 主
 ‘まだ怒っていない。’
- (59) niwan miku ala binanau'az
 NEG 好き 要る 女
 ‘まだ奥さんを欲しくない。’
- (60) niwan tu a ma-qusaz
 NEG 助 非実 未来接辞⁽⁹⁾-雨が降る
 ‘まだ雨が降っていない。’
- (61) Abish i-sahay makthin a tilhaz niwan tu malhus
 アビッシュ 指 十 連 時 NEG 助 寝る
 ‘アビッシュは10時にはまだ寝ないだろう。’
- また、niwan は所有動詞 yanan と一緒に用いることができる。
- (62) niwan yaku yanan azazak
 NEG 1. 単. 主 所-持つ 子供
 ‘まだ子供がいない。’

3.5.2 niza (もう～ない)

今まで実現していた事態が、今後も実現することを否定する。

(14)

(63) *thuini niza tu m-riqa-riqaz lhqa ribush a qnuan*
今 NEG 助 AF-繰り返し-見る 大きい鹿

‘私たちはもう鹿を見ない。’

(64) *niza tu t-mu-barumbun*
NEG 助 AF-雷がなる

‘もう雷がならないだろう。’

(65) *a niza yaku a mu-nay*
非実 NEG 1. 単. 主 非実 移-来る

‘もう私は来ない。’

3.5.3 *ingqa* (丁寧な否定)

ingqa は常に *uan*, *iza* とともに使用され、単独で現れることはない。動詞の命令形とともに用いられるが、命令の否定辞 *ata* と比べると、依頼の要素が加わるので、丁寧な表現になる。

① *ingqa uan* (まだ～しないで)

(66) *ingqa uan lhiklhik-i sa kawi*
NEG まだ 切る-IMP 助 木

‘まだ木を切らないで。’

② *ingqa iza* (もう～しないで)

(67) *ingqa iza lhiklhik-i sa kawi*
NEG すでに 切る-IMP 助 木

‘もう木を切らないで。’

(68) *ingqa iza paqa-quyash-i*
NEG すでに 歌う-IMP

‘もう歌わないで。’

3.6 否定辞 *ani* と *antu* のあらかず意味上の違いについて

インフォーマントに *ani* と *antu* の意味の違いについて尋ねたところ、あるインフォーマントは「*ani* は不要, *antu* は不是」という説明をした。ここでの北京語の「不要」は「いらぬ」という意味で、「不是」は「～ではない」という意味である。

たとえば、(69) の用例のように、命令形で指示を受けたときの答えて、その指示通りにしたくないときは *ani* で答える。

(69) A: 食べなさい。しなさい。行きなさい。

B: *ani-wak*. 食べたくない, したくない, 行きたくない。

NEG-1. 単. 主 (=yaku)

つまり、*ani* は「ことがら全体」を否定することで、「発話者のことがらに対する気持ち—したくない」を表現しうるのだろう。

(70) *ani* yaku k-m-an shawiki.

NEG 1. 単. 主 食べる びんろう

(私はびんろうをたべる) ことをしない。→ ‘私は食べたくない。’

(71) *ani* yaku tu a mu-tantu.

NEG 1. 単. 主 助 非実 移-行く

(私はいく) ことをしない。→ ‘私はいきたくない。’

また、インフォーマントの説明では *ani* にはこれから起こりうることの可能性に対する否定が含まれているということであった。*ani* には *painan* (多分) と共起する例は少なく、*antu* は *painan* と共起することで事態成立の可能性に対する否定を表すようになる。

(72) *ani* ya-simaq a qusaz-in

NEG もし-明日 非実 雨が降る-PF

‘明日は雨が降る, ことはないだろう。’

(73) *antu* a qusaz-in ya-simaq painan

NEG 非実 雨が降る-PF もし-明日 多分

(16)

‘明日は、多分雨が降らないだろう。’

(74) haya wa thaw antu painan a min-qarman shnaw

この 連 人 NEG 多分 非実 起-悪くなる 心

‘あいつは多分悪い人間にはならないだろう。’

(75) Abish antu painan a ma-riqaz bukay

アビッシュ NEG 多分 非実 未-見る 花

‘アビッシュは多分花を見に行かないだろう。’

(76) antu a qusaz-in ya-simaq

NEG 非実 雨が降る-PF もし-明日

‘明日は雨が降らない。’ (かなり断定的)

(77) ani thuini qusaz-in

NEG 今日 雨が降る-PF

‘今日は雨が降る、ことはないだろう。’

(78) thuini antu painan qusaz-in

今 NEG 多分 雨が降る-PF

‘今(家の中にいて見えないが) 多分 雨が降っていないだろう。’

ani は後続する文全体を否定するものであり、必ず文頭に用いられる。

このことに関連して、すでに先行研究でも指摘されていることだが、YES-NO question の答えに用いられるのは ani である。

(79) Q: ihu shput?

2. 単. 主 台湾人

‘あなたは台湾人ですか?’

A: ani, antu shput yaku

いいえ NEG 台湾人 1. 単. 主

‘いいえ、台湾人ではありません。’

A: ua, yaku shput

はい 1. 単. 主 台湾人

‘はい、私は台湾人です。’

それに対して、*antu* は後続する名詞句、形容詞句、動詞句などを否定する否定辞であるため、すでに先行研究でも指摘されているように、「他との対比」という意味を持つことがある (80)。そして、*ani* は文全体を否定することで、そこにあらわされている事態全体を否定することになり、習慣をあらわすこともある (81)⁽¹⁰⁾。

(80) Q:「びんろうをたべますか?」と、びんろうを食べている人に
びんろうを差し出されたときの答えは以下ようになる。

A: antu yaku k-m-an shawiki

NEG 1. 単. 主 食べる びんろう

‘(あなたは食べているけど,) 私は食べません。’

それに対して、*ani* は「びんろうをたべないこと」をその人の属性として提示することができる。

(81) A: ani yaku kman shawiki

NEG 1. 単. 主 食べる びんろう

‘私はびんろうを食べる、ことはない。(食べる習慣がない)。’

(82) ani yaku tu (sa) m-in-atara

NEG 1. 単. 主 助(助) AF-PST-悪口を言う

‘私は悪口を言う、ことはない。’

(83) antu yaku sa m-in-atara

NEG 1. 単. 主 助 AF-PST-悪口を言う

‘悪口を言ったのは私ではない。’

このように、*ani* は文全体を否定することで普遍的な否定になり、*antu* は後続する句を否定することで、他との対比を表す。

(84) ani yaku tu lhay ihun sa tuali

NEG 1. 単. 主 助 あげる 2. 単. 対 助 金

‘私はあなたにお金をあげる、ことはない。’

(18)

(他との対比なしに、「金をあげる」ということがらのみを述べる場合、*antu* は使えない。)

次に、*ani* と *antu* が同時に使われている用例をみてみよう。

(85) *haya qilha antu ma-qitan sinan-in, ma-qitan sinan-in,*
この 酒 NEG AF-よい 飲む-PF 状-よい 飲む-PF

ani yaku a ma-sinan

NEG 1. 単. 主 非実 未-飲む

‘この酒がおいしかりうとおいしくなかりうと、私は飲む、ことはなひ。’

(86) *haya wa thaw mu-tantu antu mu-tantu, ani*
この 連 人 移-行く NEG 移-行く NEG

yaku (tu) mu-tantu

1. 単. 主 (助) 移-行く

‘この人が行かうと行くまいと、私は行く、ことはなひ。’

これらの用例をみると、「おいしかりうとおいしくなかりうと」「行かうと行くまいと」というように、対比を述べている場合は *antu* が使用され、「飲まなひ」「行かなひ」というようにことがらの否定のときは *ani* が使用されていることがわかる。

つまり、*antu* は他との対比を表し、*ani* はことがら全体の否定を表すのである。

以上、否定辞 *ani* と *antu* について、統語上の違いに関連して表される意味上の違いをまとめると表1のようになる。

ani は後続する文全体を否定するものであり、必ず文頭に用いられる。そのことから、質問に対する否定の答え(日本語の「いいえ」にあたる)となる。それに対して、*antu* は後続する名詞句、形容詞句、動詞句などを否定する否定辞であるため、文中のあらゆる場所に置くことができる。そのことと関連して、*ani* と *antu* には使用における意味上の違いが表1

表1 ani と antu の意味上の違い

	対比 (A ではなく、 B である)	発話者の気持ち (したくない)	事態成立の可能性の否定 (推測)
ani	×	○	○
antu	○	×	× (painan (多分) の共起により「推測」を表す)
○の用例	(80) (83) (85) (86)	(69) (70) (71)	(72) (77)

のようにみられた。つまり、一般的な否定文として用いるときは、ani と antu の互換性が認められるが、意味的に、「他との対比」を強調したいときは antu を使用し、発話者の気持ち「したくない」を表すときは ani を使用する。また、ani は antu に比べて、事態に対する推測の意味合いを持っているといえるだろう。

3.7 否定辞につく uan と iza の用法について

たとえば、命令の否定助辞 ata に助辞 uan がつくと、命令の丁寧な否定になる。uan は語調を和らげる働きをする。しかし、目上の人に対する命令の否定も特に uan が用いられず、ata のみで使用されることが多く、年長者に対する敬語的要素はないようである。

(87) ata uan usha

NEG 行く
'行かないでください。'

(88) ata uan u-tmaz

NEG 入る
'入らないでください。'

また、uan には、Blust (2000:237) で指摘されているが、語調を和らげる働きのほかに、否定辞に uan がついた場合は「まだ」という意味を表す場合もある。

(20)

(89) uka uan yaku azazak

NEG まだ 1. 単. 主 子供

‘私はまだ子供がいません。’

ata, uka 以外の否定辞に関しては, Chen (2000:66) では, uan, iza は antu とは共起せず, ani と共起し, ani+uan は niwan と, ani+iza は niza とほぼ同じ意味になるとある。しかし, 筆者は被調査者より, ani と uan が, ani と iza が共起している用例は一例も得ていないため, ここには chen (2000:66) に提出されている用例を引用しておく。Wang (2000:269) には, (90) の用例が一例のみあげられている。また, Blust (2003) には, これに相当する用例はないようである。このことから, 現段階では, chen のいう ani と uan が niwan と, ani と iza が niza とほぼ同義だといえるのかどうかについては確定できないと考えている。この点に関して筆者が被調査者(キラシ氏, タルマ氏)に確認したところ, ani iza, ani uan はないという回答を得た。筆者が得た用例(65)と Blust (2003:468, 643) の用例(91)に a+niza がみられるので, 筆者は chen で提出されている ani+iza は a+niza であると解釈する。Blust (2003:643) の niwan の項には, ブヌン語の ni'ang (not yet) からの借用語であるという説明がある。

(90) ani=uan tu amusha (略記号は注 11 を参照)

NEG=still Det⁽¹¹⁾ intrns. Irr. go

‘I’m not leaving yet.’

(65) a niza yaku a mu-nay

非実 NEG 1. 単. 主 非実 移-来る

‘もう私は来ない。’

(91) shan-na-kilhpuz, ya ma-riium a niza tu a qusaz-in ya simaq

‘Look at the stars; if there are many it won’t rain tomorrow.’

以下(92)から(95)までの用例は Chen (2000:66) からの引用であ

る。

(92) ani=uan yaku tu a-ma-kaan.

Neg=Dur 1S TU Irr-AV-eat

'I will not eat yet.'

(93) niivan yaku tu a-ma-kaan.

Neg 1S TU Irr-AV-eat

'I will not eat yet.'

(94) ani=iza yaku tu a-ma-kaan.

Neg=Incp 1S TU Irr-AV-eat

'I will not eat anymore.'

(95) niyza yaku tu a-ma-kaan.

Neg 1S TU Irr-AV-eat

'I will not eat anymore.'

命令の否定辞 *ata*, 存在の否定辞 *uka* に *iza* がつくと、「もうこれ以上～しないで」「もう～ない」という意味を表す。

(96) *ata iza lhiklhik-i sa kawi*

NEG すでに 切る-IMP 助 木

'もう木を切らないで!'

(97) *ata iza paqa-quyash-i*

NEG すでに 歌う-IMP

'もう歌わないで!'

(98) *uka iza s nak a tuali*

NEG すでに 助 1.単.属 連 金

'私はもうお金がありません。'

(99) *uka iza sa thaw a mia-zay yakin ma-fazaq tu*

NEG すでに 助 人 連 ように 1.単.対 AF-知る 助

thaw a lalawa

人 連 話

‘私のようにもう誰もサオ語を話せない。’

4. おわりに

以上サオ語における否定表現に使用される否定辞 *uka*, *ani*, *antu*, *ata*, *niwan*, *niza*, *ingqa* について、それらの使用と意味をみてきた。サオ語において、一般的な否定辞は *ani* と *antu* であるが、この二つの否定辞は言い換えられる場合と言い換えられない場合があり、これまで、この二つの否定辞の違いは、構文的には *ani* は文頭に、*antu* は文中に、また、意味的には、*antu* が対比を表すということが取り上げられていた。本稿では、それに加えて、述語文の種類によって、その使用の違いを論じ、*ani* は文全体を否定するのに対し、*antu* は後続する句を否定することから、*antu* は対比の意味を持つが、*ani* には話し手の気持を表わす意味合いが出てくることを示した。

存在表現に関しては、これまで指示動詞に関する指摘はみられなかったので、この指示動詞の否定についても取り上げ、その否定表現をみた。さらに、存在文・所有文では、存在否定辞 *uka* に存在物・所有物を表す名詞句が後続するのに対し、所在文では所在物と *uka* との語順が自由なことと、存在文・所有文は後続する存在物・所有物が主題化されて、それらの前に助辞 *sa* が置かれ、所在文では後続する所在場所を提示するために、助辞 *tu* が置かれることを指摘した。

また、*ata* は、相手に対する命令否定のほか、独り言や相手への否定的な提案にも使用されることを指摘した。

しかし、本稿では、黄 (2000), Chen (2000), Wang (2004) で指摘されている、所有構文の否定表現にも *antu* が使用される場合について、用例を集めて論じることができなかった。さらに、この点に加えて、*ani*

と antu のそれぞれが表す話し手の気持の違いを、さらに多くの用例を集めて確定していくことを、今後の課題としたい。

注

- (1) ここで用いる表記は、子音は /p/, /b/, /m/, /f/, /t/, /d/, /n/, /th/ (/c/) [θ], /s/, /z/ [ð], /h/ [tʰ], /l/, /r/, /sh/ [ʃ], /k/, /ng/ (/g/) [ŋ], /q/, /ʔ/ (glottal stop), /h/, /y/, /w/ である。母音は /a, u, i/ の三つだが、/i/ は /q, r/ と連続するとき [e], /u/ は /q, r, ng/ と連続するとき [o] となる。/b, d/ の前と、語頭・語尾の母音は glottal stop が現れるが、本稿では、表記を省略した。
- (2) 特にことわりのないデータは、2003年1月から2006年9月にかけて筆者が日月潭徳化社で行った調査によって得られたものである。
- (3) 本稿では qaiza (必要がない) については扱わなかった。
- (4) 本稿で使用する略記号は以下の通りである。AF actor focus (シテ焦点); CAUS causative (使役); IMP imperative (命令); LF locative focus (バシヨ焦点); NEG negative (否定); PF patient focus (ウケテ焦点) PST past (過去); 主 主格; 対 対格; 属 属格; 単 単数; 複 複数; 1 1人称; 2 2人称; 3 3人称; 移 移動接辞; 起 起動接辞; 指 指示詞; 指(動) 指示動詞; 助 助辞; 状 状態接辞; 所 所有動詞; 数 数量接辞; 存 存在動詞; 動 動作接辞; 場 場所接辞; 非実 非実現; 否存 否定存在動詞; 未 未来接辞; 連 連結辞。
- (5) Blust 2003 は、sa は topicalization particle の働きもするが、その他の働きについてはまだ明らかではないとしている。早く発話される場合は 's' となり、省略されることも多い。
- (6) 名詞と名詞をつなぐ連結辞は、a が基本であるが、母音 a で終わるときは wa になる。
- (7) Chen (2000) では、antu は ani+tu から派生したものであり、antu は決して tu と共起しないとしている。筆者の調査では、インフォーマント達は、ani を使うとき、tu をつける場合もつけない場合もあり、現在では、tu が脱落していく傾向にあるようである。
- (8) この点に関しては、2006年9月に調査を一緒にした安部清哉氏((学習院大学教授) 詳しくは p. 25 付記参照) との議論をふまえている。なお、安部氏はその後の考察で次のような解釈を取られている。「『形容詞

を否定する時には、名詞や動詞の否定の場合とは異なり、その形容詞の反対語との間での相対的幅が生じることが指摘できる』が、そのような形容詞独自の特徴に起因する（「形容詞否定形の意味的相対特性」と位置づける）と考えられる。例えばそれは、「重くない」と言ったときに、意味的には「軽いという意味のレベルからそれほど重くないというレベルまでの幅が生じるため」である。名詞の「石ではない」、動詞の「ぶつからない」などは、「Aではない」と否定の意味だけであり、「砂～砂利～岩～」「あたたか～かすた～すれちがっただけ～」などというように、意味的幅が生まれるということがないからである。」

- (9) 非実現の a は、動詞の前に置かれ、多くの動詞は接頭辞 ma-とともに a ma- の形で未来を表す（用例 (60) (75) (85)）。しかし、用例 (43) (58) (72) のように動詞に何も接頭辞がつかなかったり、(65) (71) のように移動接辞 mu-や、(74) のように起動接辞の min-がついて、事態の非実現を表す例もみられた。本稿では、この未来を表す接頭辞 ma-は、(53) のような形容詞につく状態接辞とは区別して扱っており、未来接辞とした。
- (10) 用例 (81) と (70) は同じであるが、二通りの解釈ができる。一つは (70) のように、「食べたくない」という発話者の気持であり、もう一つは (81) のように、「食べる習慣がない」というその人の属性を提示する場合である。(70) の場合、「食べる習慣がない」から「食べたくない」ということになるのだろう。
- (11) 用例 (90) から (95) までの用例の略記号は次の通りである。AV Actor voice; Det determiner; Dur Durative spect; Incp Inceptive aspect; Intrns. Intransitive; Irr Irrealis; S Singular

参考文献

(日本語文献)

- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』東京：くろしお出版。
- 新居田純野 (2004) 「サオ語 (台湾中部) における存在・所有・所在の表現」『日本語学会第 128 回大会予稿集』: 167-172
- 新居田純野 (2005) 「サオ語 (台湾中部) における否定表現」『日本語学会第 130 回大会予稿集』: 264-269
- 新居田純野 (2005) 「サオ語の動詞について—他動性の観点から—」『日本語学会第 131 回大会予稿集』: 296-301.
- 新居田純野 (2005) 「存在動詞における「遠/近」「可視/不可視」—オーストロネシア語 (サオ語) の場合—」『国文学解釈と鑑賞』1月号 至文堂: 164-173.

(中国語文献)

黄美金 (2000) 『サオ語参考語法』(台湾南島語言 4) 台湾: 遠流出版公司。
李方桂・陳奇祿・唐美君 (1956) 「サオ語記略」『国立台湾大学考古人類学
刊』7: 137-166.

(英語文献)

- Blust, Robert (1998 a) Some problems in Thao phonology. In : Shuanfan Huang (ed.) *Selected papers from the Second International Symposium on Language in Taiwan*, 1-20. Taipei: Crane.
- Blust, Robert (1998 b) A note on the Thao patient focus perfective. *Oceanic Linguistics* 37: 346-53.
- Blust, Robert (2003) *Thao Dictionary*. Taiwan: Institute of Linguistics Academia Sinica.
- Chen, Yomin (2000) Negation in Thao and Tsou. M. A. thesis. National Chung Cheng University, Chiayi, Taiwan.
- Eve, V. Clark (1978) Locations: Existential, Locative, and Possessive Constructions. *Universal of Human Language, Stanford University Press*. 4: 86-121
- John, Lyons (1968) Existential, Locative and Possessive Constructions. Introduction to Theoretical Linguistics, *Cambridge University Press.*; 388-399
- Li, Paul Jen-kuei (1976) Thao Phonology. *Bulletin of the Institute of History and Philology, Academia Sinica* 47. 2: 219-244
- Wang, Shan-Shan (2004) An ergative view of Thao syntax. Unpublished doctoral dissertation. University of Hawaii.

[付記] 本稿は、次の研究成果の一部である。

学習院大学東洋文化研究所 2005-06 年度共同研究プロジェクト「危機言語・サオ語 (台湾中部) の現地調査による基礎的言語調査と研究」(代表者: 安部清哉 (学習院大学教授), 研究分担者: 長嶋善郎 (学習院大学教授) ほか。)

[謝辞] ここに引用したサオ語の文例およびそれらに対する見識は、サオ語話者の方々、とりわけ Kilash 氏, Tarma 氏両氏に提供していただいたものである。記して感謝したい。もちろん、本稿の内容に対する責任はすべて筆者が負うものである。

Negation in Thao language (in the central Taiwan)

NIIDA Sumino

Key words: Austronesian, Thao language (Taiwan), negation, negative particle

This paper introduces the use of negation and their different semantic meaning in Thao language. Thao language has some negative particles. Each of them shows different syntactic behavior. In this paper I clarified the next points. The two negators 'ani' and 'antu' are used exclusively in negative declarative. They are sometimes able to be praphrased each other, but their semantic meaning is different. The another negator 'ata' are used exclusively in negative imperative, but it is also used in negative proposal in monologue.